

円満な結婚生活が仕事の上でプラスになるというのは、男性に限ったことではありません。女子プロゴルファーの森口祐子さんは、ママさん選手として初めてトーナメントに優勝しました。私たちも彼女に大きな拍手を送ります。

スポーツ、仕事を問わず、女性が何かを続けていこうと思うとき、最大の障害になるのは出産と育児だろう。

子供を産んで育てることに要する肉体的、精神的なエネルギーはわれわれ男性に想像もできない大変なものらしい。

ところが、その障害を乗り越えたスポーツウーマンが現れた。女子プロゴルフの森口祐子である。妊娠、出産の1年間のブランクがあったにもかかわらず、ことしカムバックを果たすと、2試合に優勝。赤ちゃんを抱いて記者会見に臨んだ姿は、日本の女性スポーツ史に新たな1ページを加えた。

●ママさんプロはわずか3人

森口は昭和30年4月13日生まれ。男性では、プロ野球の江川(巨人)、掛布(阪神)、遠藤(大洋)、大相撲では千代の富士、朝潮といった著名な選手を輩出している。ヒッジジに属している。50年にプロゴルファーとしてデビュー。58年までに23試合で優勝を記録した。生涯獲得賞金1億4千973万5千円は樋口久子、大迫たつ子、吉川なよ子、涂阿玉(台湾)に次いで5位。5本の指に入るトッププロの1人だった。

昨年2月に医師の関谷均氏と結婚、

出産のために、昨年1年間はゴルフから離れていた。長男の健夫ちゃんが昨年秋に誕生、ことし5月から本格的に競技活動を再開した。1カ月後の美津濃トーナメントで復帰後、初優勝したかと思うと、翌週の日本女子オープンも制し、2週連続優勝を達成した。日本女子オープンは日本女子プロ選手権と並ぶ権威のある大会で、数少ない4日間の競技(通常、女子は3日間)。森口のこんなに早い復調を予想した関係者はいなかった。

女子プロゴルフ界で結婚しているプロは多いが、子供のいるケースは少ない。森口のほかに荒川百合子、山崎小夜子だけ。しかし、出産後の優勝経験者という点、森口しかない。

女性スポーツの「先進国」米国を見ても、有名なのはナンシー・ロペスぐらいで、子供に恵まれ、なおかつ競技者としてトップクラスの活躍を続けることは難しい。森口は、結婚と同時に試合から遠ざかったが、ロペスは妊娠5カ月目までプレー。その後12カ月間に、出産をはさんで優勝を繰り返し、そのタフさでファンを驚かせた。昨年

春のユニデンLPGAでは、赤ちゃんを連れて、優勝記者会見。この光景が森口を初め、日本の女子プロたちに強い印象を与えたのは事実だ。

●ゴルフも、結婚も、子ども、も

子供は欲しくても、競技生活を中断してまでも、と足踏みする人は多い。まず、プレーを再開した場合に子供の面倒をみてくれる人がいるかどうか。さらに、出産による肉体的な変化、ブランクが自分のゴルフに与える悪影響。妊娠、出産を思いとどまらせる理由は、この2点に集約できる。

森口の場合は、周りの人たちがゴルフに専念できるような環境をつくっている。実家の両親が健夫ちゃんの世話をしている。いわゆる「嫁と姑」の関係も、関谷氏の母が理解のある人なので、いまのところ、何の問題もない。関谷氏が開業医ということで、経済的な面の不安もなく、スポーツを続けていくには最高の環境にあるといえる。

ブランクが比較的短かったことも幸いした。勝負に対する勘が失われていなかったことが、早い時期での優勝をもたらした。

結婚、出産による人間的な成長が森

口のゴルフに与えた影響を見逃すことはできない。「失敗しても、前みたいにかっかしくなくなった。いまは、もうひとりの自分がプレーを見てる感じがして、それがリラックスにつながっているみたい」。パットするときには、心の中かで「健ちゃん、入れるわよ。見てね」と、我が子に呼びかけることもあるという。家族の存在が、ゴルフをゆとりのあるものに変え、リラックスして実力を出させている。

出産に適した時期は、競技者としてのピークに重なることが多い。女子プロゴルフの第一人者、樋口久子は30代半ばで、出産を決意したが、流産し、そのことが離婚の1因になったともいわれている。これまでは、子供を生むとしても、樋口のように多少、時期は遅くなっても自分の地位を確立してから、というパターンしかなかった。

森口の恵まれた環境は誰でも真似できるものではないが、それでも若い女子プロたちに「こういう方法もあるのですよ」と身をもって示し、生き方の選択を増やしたことは間違いない。